

地域と学校 その13

新校舎を祝い、旧校舎とお別れ

小松 尚 (名古屋大学大学院環境学研究科准教授)

地域のボランティア活動の一つとして、この4月から図書部が発足しました。本好きの30代と40代が集まって、石榑小学校の図書室を地域の図書室としても利用しようという試みをリードします。石榑小学校を拠点にした「スクール・コミュニティ」としての動きがまた一つ始まりました。

さて今回は、待ちに待った新校舎の竣工式典と地域祝賀会についてお話しします。

手作りの竣工式典

竣工式典の開催日である2005年1月10日がやってきました。教育委員会や学校ではなく、建設委員会が中心に企画した式典です。まだ新しい体育館が完成していないので、新校舎の地域開放ゾーンにつくられた石榑ホールに招待された100人弱の関係者が集まりました。

10時に始まった式典では祝辞や感謝状贈呈とともに、この3年間の歩みが紹介されました。議論は1回ごとの積み重ねですが、この日までに開催された35回の建設委員会は、新校舎への確かな歩みでした。建設委員以外の方から感心の声が漏れてきます。誇らしげな建設委員長Otさんの挨拶に対して、この校舎を渡された校長先生の緊張した面持ちでの挨拶が印象的でした。

1時間ほどして式典も終わりの頃になると、会場の外がざわついてきたことに気づきました。式典が終わって石榑ホールの外に出ると、そこにはたくさんの方が。今や遅しと式典の終了を待っていました。



新校舎竣工式典 2005年1月10日
緊張の面持ちで登壇した建設委員長。

地域祝賀会で使い初め

11時からの地域祝賀会は、新校舎の地域開放ゾーンと中庭をふんだんに使って行われました。石榑ホールでは、この地域ではおなじみの大安寿太鼓が披露され、大安中学校 brassバンド、パパさんバンドと演奏が続きました。図書室では腹話術や手品のショーに子どもたちがくぎ付けです。図工室ではおじいちゃんたちが子どもたちと竹とんぼづくり。昼の間では石榑茶が振る舞われ、地域開放ゾーン中央のギャラリー



図書室が小さな劇場に。
普段もこんな使い方ができたら。

ではこれまでの建設委員会の議論の様子を伝える「わーくしょぶ便利」が展示されて、新校舎完成までの歩みを伝えます。

今日は本当の使い初めですから、どんな風に使われるのだろうか、何か問題はないだろうかと私も内心、少々心配でした。子どもたちはどうだったのでしょうか？子どもたちも今日初めて新校舎に足を踏み入れたのです。でも、しばらくすると中庭から子どもたちの歓声が。真ん中の滑り台に最初はおっかなびっくりだった子も、何度か滑るにつれて夢中になっていました。

お昼が近くなるにつれて来訪者はどんどん増え、中庭で、お正月らしく餅つきが始まりました。つきあがった餅は味付けられ、振る舞われます。隣では豚汁と搾りたての牛乳も。長



中庭で食事
屋内だけでなく中庭までひろがって食事ができます。



地域祝賀会で滑り初め
滑り台はあつという間に子どもたちの人気の場所になりました。

い列ができました。家庭科室で餅米をふかしたり豚汁を調理するのは、地域の女性陣。その中心はIaさんです。石榑でとれた食材を学校で調理して食べるというイベントスタイルは、この時にできあがりしました。

最後に全員が中庭に出て記念撮影をして、終わりました。1000人近く集まったと言われるこの地域祝賀会。きっと語り継がれていくであろう新校舎初日でした。

新校舎を使い始めて

小さな問題はあったようですが無事3学期が終了し、新校舎で初めての建設委員会(第36回)が3月末に開催されました。既に新校舎の完成を聞きつけた各地の教育関係者が見学に来ていることが報告され、また新年度から文部科学省のコミュニティスクール推進事業の研究指定校になることも知らされました。地域と学校の自主的な連携体制を想定していたのですが、コミュニティスクール(地域運営学校)としての公式な連携体制を構築する前段階へ進むのです。

年度末ということもあり、建設委員の皆さんが1年を、そしてこれまでを振り返っています。「竜ヶ岳が見える校舎の実現は建設委員会の議論の賜物だ」という誇らしげな声。次の体育館・プールの完成を待ちわび、屋外環境整備の計画に胸ときめかせる声。「こんな立派な学校はもったいないという声があるが、使わないともったいないのだ」「自分ももう一度ここで学びたいなあ」という声。その横で、「旧校舎のお葬式をしてあげたい」という声も聞こえてきました。

「旧校舎のお葬式」は私もぜひ行なうべきだと思い、一部の建設委員には提案したこともありました。旧校舎の建設に奔走した人々の多くがまだまだ健在の中、いつの間にか解体されていたのでは寂しすぎます。私が言うまでもなく、建設委員の方々の意見も同じでした。

コミュニティスクール推進委員会の発足

2005年4月から、石小はコミュニティスクール推進事業の研究指定校となりました。そこで、屋外環境整備の検討をする建設委員会に並行して、学校と地域の交流や協働を通して子どもたちを守り、育てようという動きを作っていくために、「石榑の里共育委員会」と名付けられたコミュニティスクール推

進委員会が発足しました。建設委員会で話し合ってきた新校舎の管理運営のアイデアや方法を実際に試行していく母体となります。もしこの体制が上手く機能し、学校と地域の賛同が得られるならば、2年後には市の条例を改正し、コミュニティスクール(地域運営学校)として発足することも視野に入っていました。まさに渡りに舟。地域と石小の連携と協働のあり方を探るこの2年間は、新校舎建設からコミュニティスクールへと頭を切り換えていく時間になりました。

「石榑の里共育委員会」の下で、地域開放ゾーンでの活動や毎月一回の地域清掃、子どもの防犯に関わる活動、地域と子どもをつなぐ活動、地域から学ぶ活動などが始まりました。この内容については次号以降で紹介したいと思います。

その中で、地域住民が一堂に会して新校舎を知り、交流を深め、これからの地域と学校を考えるイベント「石榑の里まつり」が夏と秋に開催されました。夏は7月の日曜日でした。地域開放ゾーンにある諸室がすべて会場になって、演奏発表や工作教室が行われ、地域玄関の外では、前回(その12)でも紹介しましたが、寄付の野菜で朝市が開かれました。お昼時には味噌飯が提供され、中庭の流しうめんには、子どもたちが押し寄せました。地域祝賀会もそうですが、新しい校舎の地域開放ゾーンや中庭をどう使いこなすかの試行イベントだったと思います。一方、「石小の子どもたちが少なかったな」という反省もありました。学校として地域の行事にどう参加するか。宿題になりました。現在、「石榑の里まつり」は毎年1回開催され、学校も子どもたちの学習成果を発表する機会として年間予定に組み入れて取り組んでいます。

旧校舎との別れ

いよいよ旧校舎とお別れの時を迎えました。秋の石榑の里まつりとして「校舎お別れの会」が11月に開催され、閉鎖されていた旧校舎に立ち入ることができる最後の日になりました。この日の参加者は600人。旧校舎で学んだと思いき30代、40代の姿が多く見られ、同窓会を開いた学年もあったとのこと。教室の黒板や校舎の壁には、感謝の言葉や思い出が書き込まれていました。そして、このお別れの会の数日後に解体工事が始まりました。



旧校舎お別れの会 2005年11月27日
くす玉の中からの垂れ幕には「ありがとう」。